

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00468

研究課題名(和文)「死者との対話」-ケルト文化から見たH.ブロッホ『誘惑者』の文学と政治

研究課題名(英文)Gespraech mit der Toten - Literatur und Politik in "Die Verzauberung" Hermann Brochs betrachtet von der keltischen Kultur

研究代表者

桑原 聡 (KUWAHARA, SATOSHI)

新潟大学・人文社会科学系・フェロー

研究者番号：10168346

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、H.ブロッホの未完の小説『誘惑者』(1934-1935)における文学と政治の関係を次の二点に即して、すなわち、1)『誘惑者』における「神話」とケルト文化の役割を明らかにし、同時に、2)それらがこの作品の政治的要素とどのように関連しているかを解明することを目指した。H.ブロッホの『誘惑者』が、彼が「群衆狂気論」で展開する、「人権」を「地上における絶対的なもの」と指定する政治思想と、宗教と神話の復活という自らの思想を、ケルト文化を背景とし、ナチズムの思想とは差異化し、作品化していることを解明した。だが政治と思想と「自然との共生」の統合はブロッホの突然の死によって完成されなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヘルマン・ブロッホH.Brochの作品解釈は従来主に時代批判、文化・政治批判、ナチズム批判という観点で行われてきた。しかしながら研究代表が明らかにしたように『ウェリギリウスの死』(1945)にはAugustusに対する批判という形で現れる権力批判のみならず、ヨーロッパで古来宇宙の調和を表す「天球の音楽」モチーフ、さらにはユダヤ教神秘主義カバラの言語観が主題をなしている。同様に未完に終わった小説『誘惑者』(1934-35)ではナチズム批判と並んでケルト文化に代表される神話が主題化されており、ブロッホの死によって中断されたが最終的に「自然との共生」という思想にブロッホが達する可能性を提示した。

研究成果の概要(英文)：Die Forschungsaufgabe besteht darin, den Zusammenhang von Literatur und Politik im unvollendeten Roman "Die Verzauberung" H.Brochs (1934-1935) herauszuarbeiten. Sie zielt darauf ab: 1) den Zusammenhang von Mythos und keltischer Kultur und 2) diesen Zusammenhang mit dem Politischen im Roman zu erhellen. Die Untersuchung hat geklärt: 1) warum H.Broch als Schauplatz des Romans ein von den Felsen umgebenes Tal mit Spannung zwischen Bauern und Bergbewohnern auswählt, die von der keltischen Kultur wesentlich beeinflusst sind, und 2) welche Bedeutung der keltischen Kultur und deren Mythos zugemessen wird. Die Untersuchung ist zum Ergebnis geführt, dass dem Roman H.Brochs politisches Denken, das in seiner "Massenwahntheorie" entwickelt wurde, um das Menschenrecht als das "Irdisch-Absolute" zu setzen, zugrundeliegt, und dass der Roman weiter durch die Wiederaktivierung der Religion und Mythos auf die Symbiose mit der Natur abzielt, die die Menschen in sich schließen soll.

研究分野：ドイツ文学・ドイツ文化

キーワード：ヘルマン・ブロッホ Die Verzauberung ケルト文化 群衆狂気論 地上における絶対的なもの 神話と宗教 自然 自然との共生

## 1. 研究開始当初の背景

オーストリアの作家ヘルマン・ブロッホ Hermann Broch (1886-1951)は、ヨーロッパにおける伝統的価値の崩壊を描いた長編小説三部作『夢遊の人々』Die Schlafwandler (1930-1932)の出版以来、社会・政治を含む広義の文化批判を自らの活動の中心においた反体制作家と一般に理解されてきた。1974年～1981年の間に Washington 大学教授 Paul Michael Lützel によって編集・出版された全 17 巻の、詳細な注釈を付したブロッホ著作集 Kommentierte Werkausgabe(以後 KW と略す)の出版によってブロッホの多彩な執筆活動が明らかとなった。いわゆる「古典的モデルネ」の時代(おおよそ 20 世紀前半、第二次世界大戦終了までの時期)に諸芸術は、産業化に代表される近代化が本格的に始まり欧米社会を根本的に変えた事態に対して、新しい時代に対応できる表現方法を模索した。ブロッホもそのことに敏感であり、アイルランド出身の作家ジェームズ・ジョイス James Joyce(1882-1941)の作品『ユリシズ』Ulysses (1920)の文体実験に注目し、すでに『夢遊の人々』においてそれを導入しようとした。また、オーストリアの作曲家アーノルト・シェーンベルク Arnold Schoenberg (1874-1951)が音楽において調性を放棄し、無調の、新しい作曲法「12 音技法」を創出したことにもいち早く反応した。文化に対する批判的なまなざしがブロッホの小説の基調音であることは終生変わらなかったが、新しい、混沌とした時代に対応できる文体をブロッホがその死に至るまで追求していたことも判ってきている。

さて、本研究課題が対象とする『誘惑者』Die Verzauberung は、1936年に第一稿が成立したものの、結局は未完に終わった小説である。特筆すべきはブロッホが 1951年5月30日の突然の死の日までこの作品に手を入れていたという事実である。この小説について 1941年にブロッホは「ドイツの出来事(ヒトラーとナチズム支配のことを指す:筆者)をその魔的で神秘的な背景のすべて、群衆狂気の衝動のすべてとともに(...)その根底から暴き出そうと試みた」(KW 9/2, 248)と記している。この小説では「ギソン母さん」Mutter Gisson と呼ばれる、前近代的な大地の知を代表する人物と、ヒトラーをモデルにしたとされる、流れ者マリウス・ラティ Marius Ratti との対決が、山村の医者である「私」の目を通して描かれ、ブロッホが社会心理学、社会政治学、宗教学的論文からなる「群衆狂気論」Massenwahntheorie (1939-1948)で論じた群衆狂気が山村の小さな村で生じる様が描かれている。この小説は、従来、主に政治的マニフェストを作品化したものと捉えられてきた。それはむしろ間違っていない。しかしながら、研究代表がすでに明らかにした、『ウェルギリウスの死』Der Tod Vergils (1945)において展開される形而上学から考察すると(課題番号 16K02562「コトバの形而上学 - ヘルマン・ブロッホ『ウェルギリウスの死』の文化史的研究」)、ギソン母さんの孫娘であり祖母の跡継ぎとされていたイルムガルト Irmgard が村人の群衆狂気の犠牲となった後、魂となった彼女が祖母ギソン母さんと小説最後で交わす「死者との対話」の重要性が大きな意味を持つことが予想された。Barbara Mahlmann-Bauer ベルン大学教授はこの三者の関係をギリシア神話に基づき「デメテル - ハーデース - ペルセポネ」にディオニュソス神話が加わったものと解釈している(Hermann Broch Handbuch, 145)。ブロッホがこの作品に最初「デメテル」という題を与えようとした事実からすると一応妥当な解釈と言える。しかしながら、この解釈ではブロッホが作品の最後に記したギソン母さんと死者であるイルムガルトとの対話の意味が理解できない。『ウェルギリウスの死』の形而上学は『誘惑者』理解のための重要な思想であるが、ギリシア神話、あるいは『ウェルギリウスの死』でブロッホが用いたユダヤ神秘主義思想カバラのみではこの問題を解決できない。世界の神話学に精通していたブロッホはこの作品においてギリシア神話以外の典拠を利用している可能性が高いと予想できた。本研究ではその典拠としてケルト文化を想定した。なぜならこの作品には至る所にケルト文化への暗示が隠されているからである。(「ケルト石」、金の採掘、大地の知の象徴としてのギソン母さん等)今までほとんど解明されてこなかった、ケルト文化との関係が解明されれば、ブロッホ研究に新たな、重要な寄与をなすことができると考えられた。

## 2. 研究の目的

本研究課題「死者との対話」-ケルト文化から見たヘルマン・ブロッホ『誘惑者』の文学と政治」は、平成 28 年度～30 年度の研究課題「コトバの形而上学—ヘルマン・ブロッホ『ウェルギリウスの死』の文化史的研究」の成果をもとにブロッホの未完の長編小説『誘惑者』をケルト文化の視点から再解釈しようとするものである。ナチズムの時代に世界の調和を再獲得できるかという問いに答えることはブロッホの後半生の最大の課題であった。本研究課題は、1)『誘惑者』におけるケルト文化の役割を明らかにし、ブロッホにおける「死者との対話」の意義を解明し、その上で、ブロッホの著作全体における神話・神秘主義の意義を解明することにある。同時に、2) 政治的要素がしばしば作品から切り離されて現実の政治状況に関連づけられるブロッホ

研究に対して、文学作品に描かれる政治的要素が作品構造の中でいかに扱われるべきかを小説『誘惑者』に即して分析する。

### 3. 研究の方法

本研究はプロッホの未完の小説『誘惑者』におけるケルト文化、神話および宗教の影響を跡づける点において、また、この小説の背景をなすナチズム、その時代の文学、芸術、思想とこの小説の関係を解明する点において文化史的研究である。

### 4. 研究成果

本研究課題「『死者との対話』 - ケルト文化から見たプロッホ『誘惑者』の文学と政治」は、「研究の目的」に記したように、次の二点の解明を目指した。1)『誘惑者』(1935-36)におけるケルト文化の役割を明らかにし、プロッホにおける「死者との対話」の意義を明らかにし、その上で、プロッホの著作全体における神話・神秘主義の意義を解明し、同時に、2) 文学作品に描かれる政治的要素が作品構造の中でいかに扱われるべきかを、両者が明瞭に描かれている作品『誘惑者』分析において考察することとしていた。本研究はCovid-19の世界的蔓延のために2年間の延長を強いられたが、所期の研究成果を概ね得ることができた。

ケルト文化と神話・宗教の影響については、作品に現れる「冷た石」der Kalte Steinが元来Keltenstein「ケルト石」であったこと(小説内で説明されている)、「蛇=竜」の象徴(トリスタン伝説における竜へ子どもを捧げる供犠と竜退治の伝説、ケルト人が得意とした金属(とりわけ金)の採掘と加工、大地の知の象徴としてのギソン母さんと薬草採取(トリスタンとイゾルデの物語でアイルランド出身のイゾルデとその母は薬草による治療に秀でていた)等だけでも明らかであるが、この作品の構成・構造もまたケルト文化を示唆している。

この小説の舞台はチロル渓谷地方(プロッホが小説を執筆したメーゼルン Moesern はケルト文化のハルシュタット Hallstadt 文化圏に位置する)を思わせる、周囲をクブロン峰に代表される険しい高山に囲まれた谷にある村である。この村は以前金鉱山があった上クブロンと農民が主の下クブロンに分かれる。上クブロンには主にギソン母さん一家を初め猟師、森林管理官など山と直接関わる人々が住んでいる。この上クブロンと下クブロンは仕事において農耕=定住の下クブロンと森林=漂泊の残滓を残す上クブロンの対立があり、それはまた裕福と貧困の対立をも含む。この村、下クブロンに流れ者マリウス・ラティがやってきたことによって今まで潜在していた対立が顕在化し、緊張を生むことになる。下クブロンの農家に受け入れられたマリウスと、上部クブロンの、前近代的な大地の知を代表するギソン母さんとの対立が始まる。この小説は近代医学の進歩主義的自己目的化に疑問を感じ、ウィーンとおぼしき都市の病院を辞めこの村にやって来た「村医者」によって体験され語られる、二つの事件を中心に進行する。マリウスに魅了され惑わされたギソン母さんの孫イルムガルト - ギソン母さんの後継となることが決まっていた - が、金を産出すると言われるクブロン山に犠牲として捧げられるという事件と、クブロン鉱山での金の発掘と落盤という事件である。いずれもマリウスとその部下ヴェンツェル Wenzel に主導され、村全体がこの狂気に巻き込まれる。ここにはプロッホが「群衆狂気論」で論じた群衆狂気が山村の小さな村で生じる様が描かれている。それ故この小説は、今まで主に政治的マニフェストを作品化したものと捉えられてきた。

しかしながらこの小説最後に現れるギソン母さんと殺されたイルムガルトの対話では注目すべき発言がギソン母さんによりなされる。イルムガルトが父の不在を嘆くのに対し - 「父の不在」はこの小説の隠れたモチーフである - ギソン母さんは、イルムガルトが「人間の言葉」をまだ理解できないときに、「猫の言葉」「鹿の言葉」を理解し、さらにその前には「草木の言葉」「さざ波の言葉」を話していたことを想起させ、再びそれらの言葉が判るかと問う。(KW 3, 353 以下) 小説『誘惑者』はここに至って自然というテーマの核心を衝く。

時系列で見るとこの小説は第一稿が1936年1月に完成し、その後すぐに第二稿に着手されるがその年6月に8章までで中断される。1951年に第三稿に取りかかるが、1951年5月30日プロッホの突然の死によって永遠に未完となる。1936年から1951年までにプロッホは「群衆狂気論」を構成することになる、おびただしい量の社会心理学、社会政治学、宗教学論文、さらには彼の主著とされる小説『ウェルギリウスの死』(1945)などを執筆している。「群衆狂気論」では様々な論点が論じられているが、本研究にとってもっとも重要な論点を以下に記す。

プロッホは、群衆が熱狂的なヒトラー賛美に陥ったのは、第一次世界大戦終結後の経済危機のみが原因となっただけではなく、20世紀前半に顕著となった文化危機の時代における普遍的価値の喪失から生ずる「心理的」「倫理的不安」(「人間性の独裁について」1939、「民主主義の理論」1938-39等KW 11所収)が果たした役割が決定的だったと考え、その解決策を模索する(KW 11, 76)。「絶対的価値の問い」(KW 11, 75) それは心の安心を求める「宗教的欲求」(KW 11, 61)とも呼ばれるが、プロッホの思考は、以後、いかにして地上において普遍的価値を根拠づけること

ができるかという問いに向かう。この思考過程でブロッホは、人間が「神の似姿」であるが故にその本質において人間を超えた絶対者（神）に由来する「地上における絶対的なもの」das Irdisch-Absolute (KW 12, 468 以下)を持つという思想に至る。ブロッホはこの「地上における絶対的なもの」こそが絶対的な価値であり、それが地上ではとりもなおさず「人権」と「人間の尊厳」として定立されねばならないとする。(KW 12, 468 以下) ほぼ同時代の宗教哲学者 E. トレルチ Ernst Troeltsch (1865-1922) とマルクス主義哲学者ブロッホ Ernst Bloch (1885-1977) が「自然法」を絶対的価値として人権を根拠づけようとした点においてブロッホの法思想と軌を一にしているが、ブロッホは「自然法」という概念が人間を中心に据えていないことを批判し、この概念を採用しない。(KW 12, 472)

「絶対的価値の問い」が「宗教的欲求」とも言い換えられていることは一見奇異に聞こえる。近代は宗教からの政治の独立を追求してきたからである。だがブロッホは人間を超えた絶対的なものの存在を前提としなければ普遍的価値は存在し得ないと考える。

ブロッホが『夢遊の人々』で展開した「価値崩壊」論とは「近代」(産業革命、フランス革命以降)の始まりとともにそれまで人々の行動規範であった「普遍的価値」- 例えばキリスト教倫理 - が失われた結果、とりわけ 20 世紀に入ってから、上に触れたように「心理的」「倫理的不安」が人々の心を蝕むようになった過程を論じたものである。この論の帰結としてブロッホは新たな「絶対的価値」の定立の必要性を訴える。政治的・法的には上で触れたように、それは「人権」と「人間の尊厳」を絶対的価値とする要請であり、その欠如態である人間の「隷属状態」Versklavung からの解放を訴える (KW 11, 112)。

他方、社会的にはブロッホは新しい「神話」を要請する。ドイツロマン派が 19 世紀に向かうドイツ社会を分析して「中心の喪失」と診断し、その機能を失ったと彼らが考える、キリスト教に代わる「新しい神話」(フリードリヒ・シュレーゲル Friedrich Schlegel) を要請したのと同様、ブロッホは人々の心的不安を取り除くには経済的安定のみでは不十分であり(ブロッホの念頭には第一次世界大戦後の世界恐慌とドイツのハイパーインフレがある) 心の安定のためには心理的、倫理的普遍価値の確立が欠かせないとし、心の安寧を求める人々の欲求を「宗教的欲求」と呼び、それを満たすために新しい「神話」を要請する。「宗教的中心価値の喪失によって(...) 我々の世界は個別の価値が他の個別価値と相争いそのそれぞれが他者をすべて支配しようとしている状況に陥った。」「過去数十年間の黙示録的できごとはそのような(中心価値の：筆者)崩壊の避けがたい結果であった。」「(「神話と晩年様式」KW 9/2, 227) 両引用とも 1947 年に執筆された論文からではあるが、ブロッホが神話と宗教に関心を抱き続けてきた背景を明らかにしてくれる。「神話は、それが現実の世界において一つの規範となり(...) 人間の行動に具体化し日々の生活における人間の行為全体をその色に染め導くとき、宗教となる。」「(前掲論文 218) 神話の要請とは、荒廃した、混沌とした世界と向き合っているブロッホにとっては「世界の言語に絶する災厄に対抗できる重みと力」のある新しい神話を創出し、「人間の形而上学的、倫理的欲求」(前掲論文 227) を満たすことを意味する。それはすぐれて倫理的問題である。彼の普遍的価値志向には人権に向かう道筋と神話に向かうそれが共存している。この両者は統合され得るのだろうか。

それではブロッホが考える「神話」はどのようにして実現されるのか。それはブロッホが「晩年様式」Altersstil と名づけるものによってであろうと考えられる。「晩年様式」とは、ある芸術家が活動している時代の「(価値の)閉ざされた(ブロッホでは否定的な意味を持つ：筆者)体系」を破壊し、「世界の新しい全体性の本質的骨組み」を新たに提示するものであり、その特徴は「抽象性」Abstraktheit である。(前掲論文 223)そしてその最初の実現者としてフランツ・カフカ Franz Kafka の名が挙げられる(229)。カフカの例で理解されるとおり「晩年」は必ずしも芸術家の一生におけるいわゆる「晩年」を意味せず、芸術家が最後に到達する様式と考えられている。

この論文は 1951 年に始められる『誘惑者』第三稿改稿の方向性を示しているように思われる。1949 年にブロッホの出版者 (Rhein Verlag 社主) であるダニエル・ブロディ Daniel Brody は 7 月 27 日付け書簡でブロッホに、「反ヒトラーテーマ」がもはや第一稿完成の時(1936 年)と比べてアクチュアリティを持たない「現在」, どのような意図で改稿するのかを問い合わせている。それに対してブロッホは政治的出来事を、時代を超越した領域に高めるすべは心得ている、また「そうするつもりだ」と答えている。(Brochs Verzauberung, hrsg. von P.M. Luetzeler 250 以下)

『誘惑者』初稿が執筆された 1936 年には、10 年後に詳述されるブロッホの思想は上で見たほどには深められてはいなかったにせよ、「価値崩壊」と「群衆狂気」については 1930 年から 32 年にかけて執筆された小説『夢遊の人々』からブロッホは考え続け、また「神話」に関しても 1932 年の講演「精神と時代精神」(KW 9/2, 177-201)においてすでに言及している。「想像力の空間で戦争に釣り合うことができるものは何か。どのようなテーマがそれに匹敵するほどに強大であるか。どのような言葉が死と比肩し得るのか。心のもっとも深い絶望と比肩し得るほどに慰謝を与える言葉とはどのようなものなのか。それは人間存在の神話そのもの以外ではあり得ず、自然の神話であり、かつ自然と人間と神の超越性の神話に他ならない。(…)今のところそれは存在しない。」「(「精神と時代精神」, 196 以下) およそ 10 年後にブロッホはついに神話の表現方法を手にする。しかしながら彼には残された時間があまりに少なかった。こうした思考過程を背

景におくと『誘惑者』第一稿執筆の際にプロッホの念頭には「人権」に向かう「絶対的価値」と「神話」に向かう思考がすでに存在していたと考えるのが妥当であろう。

『誘惑者』における「群衆狂気」の描写はよく知られているのでここでは繰り返さない。今までほとんど触れてこられなかった「神話」に関する記述を少しく考察する。

この小説を神話という観点から考察すると対立軸は、前近代的な大地の知を代表するギソン母さんとマリウスではない。「大地の知」が対立するのは「村医者」が耐えきれずに逃げてきた都市の病院で実践されている近代医学、一般化すれば科学的思考とその実践である。そこでは村医者は実験・医療機構の「一歯車」として「次の実験結果」を見据えながら「小石の上に小石」を積み上げる生活を送っていたが、(KW 3,9) ついには「科学的進歩」(176) と呼ばれるものに絶望し、「もう一つの知」(9) を求めてクブロン村にやってくる。ギソン母さんが体現するのがこの「もう一つの知」であり、それは近代知の「分析的」実験知とは対照的な「統一知」ein einheitliches Wissen、「生の全体性についての知」(235) 人間と自然を一つの全体として見る知、あるいは「分裂したものが今一度流れ込もうとする未分化のものについての知」(111) である。この二つの知の違いがもっとも明瞭となるのがそれらの自然に対する態度である。近代知の始まりにおける自然に対する態度が自然支配であるとする、ギソン母さんの自然に対する態度は帰依であり、彼女は人間も動植物、あるいはクブロン山も同様に自然の一部であると感じている。村医者は彼女の「生の全体性についての知識」に感嘆し、「ギソン母さんの地上の時についての、地上の深みについての知識は偉大である」と感じる。(235) 彼女のこの世界観はまた永遠の再生の思想でもあり、地上のものと宇宙が同じ法則に従うという、古代から存在するコスモスとマイクロコスモスの照応の思想に通じる。クブロン山とその自然を背景にケルト神話がギソン母さんという姿をまとして立ち現れている。殺されたイルムガルトとの対話では象徴的に「猫の言葉」「鹿の言葉」、さらに「草木の言葉」「さざ波の言葉」に触れられていた。

反近代ということ言えばマリウスもギソン母さんの側である。だがマリウスの自然に対する態度は支配である。「もう一つの知」を身につけようとしながら自然支配を目指すマリウスはナチズム同様倒錯している。

しかしながら村医者がギソン母さんの「もう一つの知」について考えを巡らすうちに、彼の思考にズレが生じる。「村医者」の関心は自然から離れ「人間」に回帰する。「われわれの存在の中心にのみ知は存在する、人間が人間であるために必要とするものについての知、人間性と文化についての知であり、文化の知でありギソン母さんもまたその一員である敬虔な知が存在する。血の知ではなく技術の知でもなく、人間の自分自身についての知である。われわれの存在の真ん中に、ただその真ん中のみ、周縁の暗い陶酔ではなく、原初的なものの陶酔でもなく技術のそれにでもなく、人間の存在自体にわれわれの中の神的なものは住まいしているのだ。」(286 以下)

そしてギソン母さんと村医者のズレは村医者による小説最後の「後記」においてさらに明瞭となる。「だが不法行為は人類と人間における神的なものに対する陵辱である。そしてそこにこそイルムガルトもまた破滅した恐怖の源があるのだ。何という誘惑なのだ！自然に回帰するための何たる邪道であることか！それに対してどのような復讐を自然はすることだろう！というのも自然こそは陵辱された精神に復讐するものであり、精神と自然は一つなのだから、そして人間には自然とその永遠への道はただ一つしかない、それは精神であり、人間の恩寵であり、神による人間の顕彰なのである。」(369) 村医者はギソン母さんとその大地の知に畏敬の念を感じながらも「人権」という「地上における絶対的なもの」の価値定立の方に向かっていく。『誘惑者』では「人権」と「神話」、「精神」と「自然」は統合されていない。ギソン母さんの思想からすれば自然は精神・理性の上位に位置する。ギソン母さんの思想は誤解を恐れずに言えばアニミズムに他ならない。また動物と植物の言葉を理解するためには聖書に由来する、人間を「神の似姿」とする見方も放棄されねばならない。『誘惑者』においてプロッホが他の作品以上に自然と神話をテーマの一つとしたことは事実である。また「人権」と「自然」を統合しようと試みたことも確かである。しかしながら自然を精神の上に位置づけること、政治を自然の中に位置づけることはプロッホにはできなかつたように思われる。両者は平行線を辿っているように見える。プロッホがその死までこの作品の改稿を考えていたことは彼がこの問題に自覚的であった証左であるかもしれない。だが、上で概観したようにプロッホの死に至るまでの思想的発展からすると両者の統合は明確な形では示されなかつたのである。

研究代表は令和6年3月に国際シンポジウムを主催し、上記の研究成果を発表した。

Internationales Symposium

Die Kunst / Literatur im Zeitalter der klassischen Moderne. Ein erbittertes Ringen um einen neuen Ausdruck

「古典的モデルネの時代（注：20世紀前半のドイツ文学を指す）における芸術 / 文学。新しい表現を求める苛烈な戦い」

（2024年3月14日・15日於新潟大学）

以上が「ケルト文化から見たヘルマン・プロッホ『誘惑者』の文学と政治」の研究成果である。自然と人間の関係を問うた研究代表の本研究成果は、日本においては西洋とは異なった自然に対する態度が文化の底流にあるが故に、「自然」を巡る東西の比較文明論にも発展させることが可能であろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Satoshi Kuwahara	4. 巻 Anschauen und Benennen
2. 論文標題 Goethes Italienreise und das Konzept der Kunstkammer	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Anschauen und Benennen. Beitrage zu Goethes Sammlungen und Studien zur Naturwissenschaft	6. 最初と最後の頁 27-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 桑原聡	4. 巻 38/39
2. 論文標題 魂の浄化とグノーシス主義 J.v.アイヒェンドルフ『あるのらくら者の生涯から』第3章を起点として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 あうる～ら	6. 最初と最後の頁 16-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Satoshi Kuwahara
2. 発表標題 Die Bedeutung der Wuenschelrute in Die Verzauberung Hermann Brochs
3. 学会等名 German Studies Association (The Concept of the Masses in Literature. Visual Arts and Theory (1) Hermann Broch) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Satoshi Kuwahara
2. 発表標題 Die Wuenschelrute. Ein literarischer Topos in der deutschen Literatur: Von Joseph von Eichendorff bis Hermann Broch
3. 学会等名 中華人民共和國中山大學（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Satoshi Kuwahara
2. 発表標題 Die Verzauberung als Stiftung eines neuen Mythos. Menschenrecht und Symbiose
3. 学会等名 Internationales Symposium Die Kunst / Literatur im Zeitalter der klassischen Moderne. Ein erbittertes Ringen um einen neuen Ausdruck (国際学会)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Satoshi Kuwahara (Hg.)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 IUDICIUM Verlag GmbH	5. 総ページ数 163
3. 書名 Phantastische Literatur	

1. 著者名 Satoshi Kuwahara	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Wallstein Verlag	5. 総ページ数 588
3. 書名 Aussteigen um 1900. Imaginationen in der Literatur der Moderne (Wortmetaphysik in Hermann Brochs Roman Der Tode des Vergil)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------